大阪大学
新世紀レクチャー

飲酒／禁酒の物語学

―アメリカ文学とアルコール―

森岡裕一

大阪大学出版会

大阪大学
新世紀レクチャー

飲酒／禁酒の物語学

―アメリカ文学とアルコール―

森岡裕一

江苏工业学院图书馆
藏书章

大阪大学出版会

森岡　裕一（もりおか ゆういち・大阪大学大学院文学研究科教授）

1980年　大阪大学大学院英文学専攻博士課程前期（修士課程）修了　文学修士
1980年　大阪大学文学部助手、1981年より言語文化部
1985年　奈良女子大学文学部助教授
1995年　大阪大学文学部助教授、1999年より現職

主　著　『「ビジネス・ウイーク」を読む』生産性出版（1994年）共編著
『イメージとしての都市』南雲堂（1996年）共著
『酔いどれアメリカ文学』英宝社（1999年）共著
『シャーウッド・アンダソンの文学』ミネルヴァ書房（1999年）共編著
『スモールタウン・アメリカ』英宝社（2003年）共著
『新世紀アメリカ文学史』英宝社（2004年）共編著

大阪大学新世紀レクチャー

飲酒／禁酒の物語学 ——アメリカ文学とアルコール——

2005年9月26日　初版第1刷発行　［検印廃止］

著　者　森岡　裕一

発行所　大阪大学出版会
代表者　松岡　博

〒565-0871 吹田市山田丘1-1
大阪大学事務局内
電話・FAX　06-6877-1614（直）
URL : http://www.osaka-up.or.jp

組　版　（株）桜風舎
印刷所　（株）太洋社

© Y.Morioka 2005　Printed in Japan

ISBN4-87259-150-X C3097

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

飲酒／禁酒の物語学　目次

まえがき……1

第一章　ほろ酔い――ポー、チーヴァー、アンダソン――……3

1　酒と悪魔　3

2　増殖する酒害　8

3　酒と抑圧された性　12

第二章　酩酊――禁酒小説とは何か――……25

1　禁酒小説の物語学　25

2　一八四〇年代の小説群　31

3　崩壊する村――『酒場での十夜』論――　43

第三章　インターールード——アルコールと創造性……61
1　酒と性衝動　61
2　アルコホリズムとは何か　65
3　大量飲酒と創造性　71
4　ロストジェネレーションとボヘミヤニズム　75
5　アメリカにおける飲酒　79
6　四天王その他の酔いどれアメリカ作家　86

第四章　泥酔——エスニシティとジェンダー……91
1　「酔いどれアイリッシュ」の実体　91
2　『風と共に去りぬ』におけるアイリッシュ・ドラマ　99
3　黒人と飲酒　107
4　「酔っ払ったインディアン」の虚実　112
5　女性と飲酒　118

第五章　禁断症状I——フィッツジェラルドとオニール……125
1　フランシス・スコット・フィッツジェラルド　126
2　髪は細部に宿る——『偉大なるギャツビー』論　133
3　ユジーン・オニール　146
4　『地平線のかなた』における「叔権制」　151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　禁断症状Ⅱ——ヘミングウェイとフォークナー……161
1　アーネスト・ヘミングウェイ　161
2　マカンバーの改悛　167
3　ウイリアム・フォークナー　178
4　「アル・ジャクソン」物語と変身モチーフ　187
第七章　回復——AA、映画と小説、文献解題……193
1　AAの告白ナラティブ　193
2　アメリカ映画とアルコール　197
3　酔いどれ研究小史　201
注……205
あとがき……219
索引……223

まえがき

酒の文化研究に関する論考は以前から存在しているが、アメリカ文学・文化と酒の関わりを考察した研究はとぼしい。しかしながら、一九世紀前半のアメリカでアルコール消費量が増大し、その結果生じたさまざまな問題への危機意識から禁酒運動が盛り上がりを見せ、そうした運動に禁酒小説と呼ばれるジャンルの小説群が大いに貢献したこと一つを取ってみても、酒との関わりでアメリカ文学／文化を考えることには少なからぬ意義がある。また、アメリカは禁酒法という世界でも稀な実験を国家的規模で行った国であり、おそらくはその結果、異様なほどに高い比率でアルコール依存症作家を今世紀初めに生み出しており、しかも、それらの作家たちの多くが自らの飲酒体験を題材に作品を発表しているという事実がある。

そのような点を踏まえ、植民地時代から現代に至るアメリカの歴史における酒の持つ意味を考察しつつ、とりわけ一九世紀の節酒／禁酒運動にみられる発想法とレトリックを文学との関わりの中であとづけ、加えて、二〇世紀初めのいわゆるモダニズム文学を飲酒の視点から読み直すのが本書の目的である。

そもそもの出発点は、一九九六年に筆者が企画したフォーラムにある。その後、同じメンバーで研究会を組織し、その成果は『酔いどれアメリカ文学』（英宝社、一九九九）となって結実している。筆者は同書で「酔いどれアメリカ文学序説」という項を担当し、主として本書の第三章と第四章で述べる人種、民族、性差から見た酒、アルコールと創造性、といった観点から問題整理を試みた。その後、「アルコールとアメリカ文学／文化の関係に関する研究」というテーマで日本学術振興会の科学研究費補助金を受け研究を続けてきたが、本書はその中間報告とも言う

べきものである。

本書は、背景的知識に関する啓蒙的な部分と、オリジナルな作品解釈とが入り混じった叙述になっているが、この種のテーマが比較的なじみのないものだけに、必然的に選択しなければならなかった結果である。また、飲酒／禁酒の視点からアメリカ文学を切るという一貫した視点を保持したつもりだが、モダニズム文学を検討した箇所では、ときに酒の話題からはずれ、酒の話題の延長線上に現れる問題点を分析の対象にすることをあえて避けなかった。酒の話題や禁酒小説という決して文学的とは言えないテクストの分析に終始するだけでは、文学の研究書としては物足りないという思いゆえの判断とご理解いただきたい。

それぞれの章につけたタイトルはいわばしゃれっ気でつけたネーミングであり、各章の内容と格別関連しているわけではない。本書を執筆するうえで、いわば筆者の興奮の度合いを酔いどれのプロセスに当てはめ、それをたまたま各章に割り振った結果がそうなったという以上の意味はない。簡単に各章の内容を紹介しておくと、第一章は酔いどれアメリカ文学への導入を三人の作家の短編を用いて行った。第二章は、禁酒小説に関する考察である。第三章はアルコール依存とは何か、アメリカにおける飲酒、飲酒と創造性、飲酒と性衝動などの話題を整理した章である。第四章では、アイリッシュ、黒人、ネイティヴ・アメリカンといった人種・民族と酒、女性と飲酒という問題を考察してみた。第五章と第六章では酔いどれ四天王と言うべき、フィッツジェラルド、オニール、ヘミングウェイ、フォークナーを俎上に上げ、その文学と酒との関わりについて分析した。第七章は禁酒団体の実情、禁酒を描いた小説と映画、および研究小史から成っている。

第一章　ほろ酔い――ポー、チーヴァー、アンダソン――

1　酒と悪魔

アメリカ文学にはアルコールが満ち溢れている。そのさまざまな現れについて順をおって見ていくことにするが、この章では三人の作家の短編小説を概観することで、アメリカ文学とアルコールの関係を考えるイントロダクションとしたい。まずは一九世紀の作家、エドガー・アラン・ポー（一八〇九―四九）である。ドナルド・グッドウインは、二〇世紀作家とアルコールの関わりに関する先駆的な著作の中で、第一章をわざわざポーに割き、彼をアル中アメリカ作家の伝統の源だと規定しているが、それほどにポーとアルコールの関係は深い。もちろん、禁酒の誓いを立てたにもかかわらず、立ち寄ったボルティモアで一杯の酒を口にしたことから、最後は野垂れ死にしたとされていたこれまでの説に対して、別の死因を想定する意見が近年出されるなど、酒にまつわるポーの伝記的側面については依然検討すべき点はあるだろう。だが、ポーが大量飲酒の嗜癖に苦しんでいたことは、彼自身および第三者の発言からも明らかであり、アメリカ文学と酒を語る上でポーの存在は無視することができない。

批評家の間で評価の高い「アモンティラードの樽」（一八四六）はタイトルからして酒と大いに関わりがある。フォーチュナトという名の酒通の人物に、理由は明かさないまま復讐を誓った語り手が、彼をアモンティラードというシェリー酒の逸品を鑑定させるという話で釣り、一族の墓穴に通じる地下の貯蔵庫へ引き入れる。そこは途中に骸骨がごろごろころがっている不気味なところで、メドックワインで相手を興奮させ奥の窪みまで連れ込んだ語り

手は、油断した隙をついて相手に鎖をかけ動けなくした後、窪みを石と漆喰で塗りこめ人知れず殺害するのである。壁の中への封じ込めというモチーフを軸にしている点では「黒猫」同様の作品だが、動機が不明な点で不可解さが残り、逆に寓意的な読みを誘う不思議な作品である。動機の不在を埋めるべく、当時の文壇でポーをモデルに禁酒小説を書いた人物への文学上の意趣返しという、ポーの個人的感情を読み込む解釈もある。だが、本書ではむしろ、酒にまつわる寓意をこの作品に読み取ってみたい。

たしかに、語り手がアモンティラードという酒の名に言及しただけで、思わず我を忘れ「アモンティラード」の銘柄名を四度絶叫しながら、咳が止まらない身をおして冷え冷えとした地下へと急ぐフォーチュナトの姿は、まさに酒のために理性を失った大酒飲みの姿そのものだ。そういえば、彼が導き入れられる地下室に打ち捨てられた骸骨は、酒で身を滅ぼした幾多の男たちの末路の象徴だと読めなくはない。途中、二人がメドック酒を飲む場面で、フォーチュナトは「われらの回りに眠るこの方々に乾杯」と言い、語り手は皮肉にも「あなたの長寿を祈って」と言う。フォーチュナトがアルコール依存症者である証拠はないが、酒がきっかけとなって死に至るという図式は、そのまま、次章で詳述する禁酒小説のプロットとパラレルな関係を成している。

その関連で言うと、犠牲となるイタリア人の名がフォーチュナトとされていることは無視できないだろう。これは英語でいうFortunateであり、「幸運な」と「宿命づけられた」という意味を合わせ持っている。つまり、酒という至福の喜びを堪能するべく、地獄へと転落する運命をたどる人物の物語にまことにふさわしい名であると言えるのだ。それこそまさに大量飲酒者の置かれている状況を端的に表現したものであり、だとしたら、ポーの意図はどうあれ、この物語は結果的に酒の両義性を極端な形で描き出しており、レノルズも言うようにもっとも道徳的な物語とも読めるのみならず、禁酒物語のジャンルに属す資格を十分有しているものと思われる。

寓意のレヴェルからさらに踏み込んで、アルコールの悪しき影響を作品のプロットに取り込んだ作品が「黒猫」

（一八四三）である。この作品は、周知のように、異常な犯罪者心理、ポー言うところの「天邪鬼（あまのじゃく）」（"Imp of Perverse"）により皮肉にも自らの罪を暴いた語り手の深層心理を描いた作品として読み継がれてきた。だが、同時に、この短編が、アルコール依存症と思しき語り手の、アルコールによって引き出された心の闇を描いた物語でもあるという側面はもっと強調されていいだろう。優しく、情け深い性格の持ち主である語り手が、愛情深い妻とさまざまなペットの動物に囲まれた幸せな家庭生活を営んでいたところ、人生の歯車が狂いだし、家庭内暴力をふるい始める。とりわけペットの黒猫を虐待したあげく殺害するが、第二の黒猫が出現し、ますます錯乱した語り手は、黒猫を亡きものにしようとした際、誤って妻を惨殺してしまう。壁に死体を封じこめ犯罪は隠蔽されたかに思えたとき、壁の中に知らずに塗りこめていた黒猫が立てたと思しき物音に混乱した語り手が、警官に壁の秘密を暴露してしまうという話である。

物語は死刑囚として刑の執行を待つ語り手の回想という形を借りて語られる。冒頭、語り手は、これから語る話が「きわめて荒々しいながら、きわめてありふれた話（the most wild, yet most homely narrative）」だと言う。彼はまた「一連の家庭内の出来事だ」とか「平凡陳腐なこと」という点を執拗に強調している。黒猫の片目を抉り出し絞殺するという動物虐待に加え、妻の頭を斧で割る犯罪など異常とも言える出来事が、いかなる意味で平凡だと言えるのか。ここで注目すべきは、語り手の幸せな生活が壊れ始めるのが酒のせいであることだ。妻にも動物たちにも優しかった語り手が、酒に溺れることで、日毎に不機嫌で情緒不安定となり、妻に汚らしい言葉をはき、ペットの扱いも粗雑になるなど状況は刻々悪化し、挙句は妻、動物双方への究極的暴力という筋書きをたどる。最初の異常な兆候は、ある夜、酔って帰宅した語り手がペットの黒猫をつかまえたときに、驚いた猫が彼の手を軽く噛んだことに我を忘れて激怒したことだ。「本来の魂が私の体から飛翔し、酒で煽られた悪魔的という以上の悪意が全身の隅々まで戦慄を与えた」と感じた語り手はナイフで黒猫の片方の眼球を抉り出すのである。その直後、語り手には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自らの行為を恥じ、自分を怖がる猫の姿に哀れを感じるほどに「もとの心（old heart）」は残っていたが、やがて、「自己の本性を冒涜し、ただ悪のために悪にふけり、みずからを苦しめんとする魂の量りがたい渇望感」ゆえ、ついに黒猫殺害に至る。

語り手は自らの堕落を「飲酒という悪魔の働きを通して（through the instrumentality of the Fiend of Intemperance）」もたらされたと嘆く。酒害が個人の力を超えたある恐ろしい力を秘めたものであるとの認識に基づくものであろう。しかし、同時に語り手は「（こう告白することを恥じるが）」との但し書きを忘れない。ここにはからずも示された考え方は、後の章で詳しくふれることになるが、当時有力だった、いわゆる道徳説の流れを引く考え方である。すなわち、アルコール依存が個人の力を超えた（肉体的）病気ではなく、本人の自覚と意思の力で制御ができ、また、そうしなければならないモラルの問題だと考える立場である。それゆえに酒という悪魔への敗北を告白することには羞恥心が生まれるのである。「黒猫」の語り手の、自らを蝕む酒の害悪に対する思いは、このように複雑で両義性を孕んだものだと言える。さらにつけ加えると、外在的な酒の影響力を最初に印象づけることで、後に起こす恐ろしい犯罪に対して読者の同情を引こうという語り手の無意識の願望があったのかもしれない。

二つの作品が書かれた一八四〇年代というと、ポー自身が関わったワシントニアン運動が勢いを持ち、禁酒小説が大量に流布した時代であった。「黒猫」のプロットに近い話は、その種の文献、講演の中でも、とりわけ、デイヴィッド・レノルズが「暗い改革者」と呼ぶ、もっぱら扇情的な場面を売り物にしていた作家、講演家のいわば定番であったようだ。詳しくは次章にゆずるとして、ここではもう少し早い時期の作品を一つだけ例に挙げておこう。メイソン・ウイームズが一八一二年もしくは一三年に書いたとされるパンフレット『酔いどれの鏡』はさまざまな大量飲酒者が起こした事件を列挙している。たとえば、船大工をしているポーツマスのある男は、帰宅した彼を迎えた妻と三人の子供たちを、酔ったあげくの幻覚症状から、毒蛇が彼を襲ってきたものと間違え、「黒猫」の語り

手同様、持っていた斧で全員惨殺してしまう。また別の話では、ある酒場で同席した大男が酔った勢いで語り手に、誰かを殺さねば気がすまない、お前は誰を殺したらいいと思うかと問い詰めたので、怖くなった語り手が奥で一人静かに酒を飲んでいた小柄な男を指したところ、男は躊躇なくライフル銃でその小男を殴りつけ、頭蓋骨を叩き割ってしまったというのもある。ウイームズ以外にも、アルコール依存症の男が妻の頭を斧でかち割るといった類の話は決して珍しくはなかった。これらの話は、大量飲酒を殺人という暴力行為に結びつけ、禁酒の戒めを説くというより、あくまで世間でよく知られた酒害の恐ろしさ、酒の魔性性を誇張して扇情的にドラマ化したある種のエンターテインメントとして読むべきだろう。もちろん、ポーが扇情的な場面描写を最小限にとどめながら、彼が「天邪鬼」精神と呼ぶ人間心理の奥底を見つめ、あくまで犯した罪とそれに対する語り手の自己心理の分析、および、その行為が自らにはね返る様を冷静に観察しえた点において、これら大量に出回った禁酒物語との間に一線を画すものであったことは言うまでもないが、ポーの「黒猫」がこのような文化的土壌において生まれたことを知っておく必要はあるだろう。

ポーを取り巻く禁酒小説の視点を考慮に入れた場合、語り手が悪魔と呼んだ酒と、ギリシャ神話で冥府の王を指すプルートーと名づけられた黒猫との間には何らかの関係がないだろうか。逃れようと毛嫌いすればするほどまとわりつく黒猫を抹殺してからも、語り手は猫の幻を頭から追い払えず、それは語り手の頭の中で脅迫観念と化す。第二の黒猫に出会うのは、「背徳の巣窟」のような酒場であり、しかも、猫が乗っていたのは店の自慢の大きな酒樽の上であった。その猫を見た語り手は即座に「これこそまさに私が求めていた生き物だ」と直感する。しかし、第一の黒猫同様、すぐに嫌悪感が募り、あたかも「疫病の息遣い（breath of a pestilence）」を避けるように忌避しつつ、執拗に近づく黒猫に対して語り手は恐怖感すら抱く。その恐怖感を告白するに当たり、語り手は「告白するのを恥じる」という言葉を添えている。あのアルコールの呪縛を語る際に使ったのと同様の台詞である。つまり、彼が

「悪魔の化身」と呼ぶ黒猫は、語り手にとってもう一つの悪魔であり病であるアルコールと同じ位置づけを与えられているのである。黒猫を酒のメタファーだとまで言うのは言い過ぎかもしれないが、「アモンティラードの樽」以上に、酒のモチーフがこの短編で重要なファクターになっていることはまちがいないだろう。そして、多くの禁酒小説が語る大量飲酒者の悲劇の背後に、当時の悲惨なアメリカの現実があったとするなら、この短編で語られる体験がありふれた家庭内の物語（domestic narrative）だという語り手の言葉はまさに正しかったことになる。

最後にもう一つ付け加えておくと、これも後で述べるアルコール治療の草分け的人物にベンジャミン・ラッシュという医師がいる。彼はアルコール依存症者のたどる悲劇的経路を温度計に見立てて視覚的に説明しており、その中で、最終段階の事例は殺人、それに対する罰は絞首台へ送り込まれることだとして警告を発している。ところで、「黒猫」に現れる不思議な二番目の猫はプルートーと瓜二つながら一箇所だけ違いがあり、それは白い斑点がついていることであった。その白い斑点の形は、他ならぬ「恐ろしい絞首台、恐怖と犯罪の、苦悶と死の、あのおぞましい装置だった」のである。

2　増殖する酒害

次に二〇世紀に目を移してみよう。ポー同様アルコール・薬物依存症者でありながら、断酒治療の後、禁酒の誓いを実行してアルコールからの脱却に成功した作家にジョン・チーヴァー（一九一二―八二）がいる。長編も書いているが、なんといっても、『ニューヨーカー』誌などに発表された都市郊外族の生態を活写した短編が有名である。チーヴァーには酒が小道具として登場する作品は数多いが、ここでは特に重要と思える二、三の短編に絞って検討しておくことにする。

チーヴァー作品における酒は、「黒猫」で見た狂気の世界を誘発するものではなく、あくまで日常生活上の失態を招く酒である。したがって、読者は最初、自然な共感と反発、ときには滑稽味すらあわせ感じつつ、しかも酒飲みの場合なら、自らの苦い体験を重ねて読み進めるものの、途中から話の深刻化に落ち着きの悪さを感じさせられる類のものが多い。たとえば、おそらくチーヴァーの短編の中でも最も短い「再会」は父と息子がつかの間、ニューヨークのグランド・セントラル駅で再会する話である。まだそれほどの年齢には達していないと思える息子が旅の途中、両親の離婚後三年間会っていなかった父親と乗り換えのためのわずかな時間に再会する。彼は長く会っていない父親を他人のようなものだろうと想像するが、一目見ただけで、「わが血と肉を分かち合う存在」だと感じ、ハンサムな姿に自分の「将来」「運命」(doom) を投影して喜ぶ。母が愛好するバラの香をかぐように父の臭いをかぐと、アフタシェーヴローションやさまざまな臭いに混じって大人の男の臭いがする。だが、うっかり読み飛ばしてしまいかねないその部分のさりげない記述に、ウイスキーの臭いが混じっていると書かれている点は見逃せない。時間は正午前、父親は会社から駅にやってきて、近くで息子とランチを食べる手はずだったが、すでに、彼はその前からウイスキーを飲んでいるということになる。それ以外、作品中には何の説明もないが、察するに父親はアル中（予備軍）である可能性が高く、ひょっとしたら離婚原因は酒だったのではないかとの憶測さえ誘う。

いずれにせよ、父親は息子をあるレストランへ連れて行く。ところが、彼はテーブルにつくや、場違いの大声を出しながらウエイターに絡みだす。息子に再会した興奮もあったのだろうが、独仏語まじりの命令口調、度をすぎた横柄な態度は、やはり、飲酒の影響による不適切な社会的行動が強く示唆されている。次々とレストランから締め出され、あげくはニューススタンドの店員にまで絡みだす父親の姿を見るにいたって、先ほどの興奮もすっかり冷めた息子は、父に別れを告げ列車に乗り込む。作品の最後は「それが父に会った最後だった」で終わっている。父を誇らしく思う高揚した思いから一転して、周囲の軽蔑の視線にいたたまれない屈辱感を感じる息子、久しぶ

りの再会で自分を精一杯アピールしようとした態度が裏目にでた父親、もし背後にアル中という病気が伏在しているとしたら、悲喜劇と呼ぶには深刻なドラマ展開と言うしかない。さらに深読みが許されるなら、息子が父親の姿に感じ取ったものが、自分の宿命的将来像だとしたら、彼もまた、アルコールの宿痾に苦しめられる日が待ち受けていることになるのだろうか。この短い作品からは何も分からない。だが、そうした暗い予感の可能性を残し、この短編は閉じられている。

「ジンの悲しみ」にはアルコール依存が二重のモチーフとして描かれている。一つは主人公の家の住み込み料理人の女性とその女兄弟の話として、もう一つは主人公の父親を巡る不幸として。前者では、自分と同じ住み込み料理人の仕事をしていた女兄弟が孤独に耐えかねて酒に溺れ、ついには亡くなったことを嘆く当の女性が、自分は酒には手をつけないと言いつつ、結局は酒に逃避し、それが原因で職を失う物語が語られる。後者は、パーティ三昧の父親がときどき、足元があやしくなってあちこちにぶつかるほど深酒が進む中、料理人やメイドが自分の酒を盗み飲むと偏執的に問い詰めては首にし、ついにはまったく無実のベビーシッターを侮辱してひと悶着おこす話である。

父親の酒がなくなった件は、料理人の女性に教えられた主人公の女の子が、こっそり流し台に捨てていたというひねりがある。彼女は酒量が増す一方の父親の身を案じそうしていたわけだが、そのことが、皮肉にも父親のパラノイア的反応を引き出したのだ。皮肉と言えば、「汚らわしいもの」と呼んで酒を軽蔑していた料理人が、最後には、アルコールに救いを求める様子を女の子が冷ややかに見つめている状況もそうだ。彼女は小学校四年生という設定だが、彼女の前で、大人たちがアルコールに翻弄される姿を暴露し、かつ、彼女自身、いつのまにか物語を展開する中心的存在になっていたというプロットが辛らつである。

「緋色の引越しトラック」はタイトルからして不気味だ。「ふしだら、不道徳」といった「緋色」のネガティヴな

意味内包もさることながら、静かで裕福なコミュニティに緋色の引越しトラックが突如姿を見せる光景は違和感を感じるに十分だろう。物語は、新参の夫婦を隣に住む夫婦が家に招くところから始まる。彼らは意気投合するが、酒が入ると新参者の夫は人格が豹変し、卑猥な言葉を口にしたり裸踊りを始めるのだ。夫人の説明によると、彼はかつて学生フットボールのスターとして一世を風靡し、ギリシャ神話の美青年アドニスにも例えられるところから、「ギリシャの神（Greek God）」をもじって「ジー・ジー（Gee Gee）」という愛称がついたほどだった。ところがこの悪癖のせいで、彼らは過去八年間、毎年引越しを繰り返すという人生を過ごしてきたのだ。

物語は、昼間は陽気で社交的なジー・ジーがあちこちの家に招待されるものの、酒が入るたびに狼藉をしでかし、ついにはコミュニティからつまはじきされ、結局、引越しを余儀なくされるという、最初からほぼ予測のつく展開をたどる。したがって、この短編の前半は、よくあるアル中の転落人生を描いた凡庸な話という域を出ない。むしろ、その面白さは、ジー・ジーのアルコール依存がいわば伝染病のように周囲に及ぼす影響を観察した後半部にあって、ポイントは隣家の夫にある。彼は自身も酒飲みということもあり、ジー・ジーの苦しみに理解と共感を示す。一緒に分析家に診てもらおう、一緒に禁酒しようとの誘いを涙を流して拒絶するジー・ジーの姿に、彼は、「ジー・ジーは、自分の中の荒地から聞こえてくる、自分の死の時刻と死にざまを予言するホルンの音を聞いているように思えた」と感じる。後述するように、アルコール依存症の行き着く極地の心象をジャック・ロンドンは「ホワイト・ロジック」と呼び、同様のレトリックで描写している。また、フィッツジェラルドの「アル中患者」に登場する人物も最後はボトルの背後に立つ死神を眺めているという趣旨の描写があるなど、ある種の虚無的な諦観、あるいはその先の死衝動は、一連の酔いどれ文学のいわば定型ともなっているが、ここでのジー・ジーを巡る状況も同様である。隣家の夫は、また、「ジー・ジーは、肢体不自由者、病者、貧者の代弁者ではなかろうか。自分の落ち度でもないのに、悲惨と苦しみのうちに人生を生きざるをえない人々の代弁者ではないのか」と考える。この考

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com